

開催地名	千葉県 袖ヶ浦市
開催日時	令和7年2月2日(日)10:50~12:10
開催場所	袖ヶ浦市民会館(昭和交流センター)
語り部	大谷 慶一(福島県いわき市)
参加者	袖ヶ浦市民等 150名
開催経緯	自主防災組織の高齢化もあり積極的な活動ができていない現状であり、若者の自治会離れも散見される。そこで、実際に災害を経験した方の講演を聞くことで、災害の悲惨さ、対応の困難さ等を感じていただき、災害について改めて考え直す機会としたい。
内容	■はじめに 1. 自己紹介 福島県いわき市薄磯(うすいそ)にて東日本大震災を経験。現在はいわき市語り部の会に所属し、多くの活動を通じて被災地の取り組みを全国に伝えている。 2. いわき市薄磯について 薄磯は福島第一原発から約50km離れた場所に位置し、放射能の影響を受けた地域でもある。震災当時は50,000マイクロシーベルトの放射線量が記録されたが、現在は0.06マイクロシーベルトと1/100以下にまで下がっている。 ■あの日のこと(津波からの避難) 震災当時、自宅は海岸から約200m、標高約6.7mの場所にあった。震度6弱の地震が発生した際、妻と妻の友人と自宅にいた。揺れが収まり、外に出ると隣家の瓦はすべて落ち、自宅の壁には40cmの亀裂が入っていた。しかし、その時はまだ津波の危険を意識していなかった。家の前の片付けをしていると、一斉下校だった小学生2人が泣きながら通学路を歩いていた。その子どもたちに、「道路の真ん中を歩いて気をつけて帰りなさい」と声をかけて自宅に向かわせた。しかし、後にその2人が津波の犠牲となったことを知り、愕然とした。あの時、すぐに避難所に指定されていた小学校に帰すべきだったと強く後悔している。 テレビをつけても映らず、車のラジオをつけた途端、アナウンサーが「3mを超える津波が来ています。高台に避難してください！」と何度も叫んでいた。時間が経つごとに津波の予測高さが変わり、最終的には「小名浜港への津波到達時間は15:10」と放送された。小名浜港は自宅から10km先の国際港。腕時計を見ると時刻はすでに15:10だった。その瞬間、最もしてはいけない行動をとってしまった。 「いつも津波が来ると言いながら、来たことがない！」と苛立ち、海を見に行ってしまったのだ。自宅から200m先の防潮堤に向かい、砂浜に降りる階段を2段登ったところで、目の前に「真っ黒い海の底」を見た。その光景は夢のようだった。 夢中で家へと逃げ戻った。家に着いた時には14分が経過していた。おそらく道中で人命救助などをしていたと思われるが、その記憶はない。津波の音も、数百軒の家が流される音もまったく覚えていない。 ■自分が助かるために瞬時に判断を 家に戻ると、妻は犬2匹を抱えながら、自宅横の神社の参道入口に立っていた。しかし、津波が迫る中、まだ階段を登っていなかった。彼女は近所の2人の老婆を連れていたのだ。1人は77歳で元気な女性、もう1人は92歳で足が不自由な女性。92歳の女性を背負おうとしたが、ずり落ちてしまった。その時、振り返ると、黒い埃が立ち上るのが見えた。その瞬間、私は自分だけで階段を登る決断をした。 結果として、77歳の女性は津波にのまれながらも生還。しかし、92歳の女性は亡くなり、その遺体を自分で発見することになった。 その決断は今でも正しかったと考えている。もしあの時、92歳の女性を背負おうとし続けていたら、全員が命を落としていたかもしれない。 当時、薄磯は小さな地域でありながら、116人もの犠牲者が出た。その多くは、「高を括って逃げなかった人々」だった。津波は想定を超える規模で襲ってくる。その現実を甘く見てはいけない。

■まとめ

災害から身を守るたった一つの方法は、「逃げること」。

しかし、その「いつ逃げるか」は、最終的に一人一人の判断に委ねられる。

備蓄をしても、津波で流されてしまえば何の役にも立たない。

そのため、備蓄は「自分のため」ではなく、「他人のため」にするもの。被災地へ送るためのもの。

「何も持たずに、命だけ持って逃げる」ことが、最大の防御となる。

そして何より、自分がその状況に置かれたとき、どう行動するかを日頃から考え、イメージトレーニングをしておくことが重要である。

自分の命は、誰かが守ってくれるのではない。自分で守るしかない。



開催地より

自分の命は自分で守ることの大切さについて、改めて認識することができた。今後の防災活動の参考になる点があり、今後の自治会自主防災組織などの活動に役立てていきたいと思う。